

## 書 評

Leo Dümpelmann: Kreation als ontisch-ontologisches

Verhältnis. Zur Metaphysik der  
Schöpfungstheologie des Thomas  
von Aquin. (Symposion, Bd. 30)

Verlag K. Alber, Freiburg/München,  
1969, 160 S.

渡 部 清

トマスの創造論を包括的に取り扱ったこの研究論文は1968年冬ミュンヘン大学に提出された Dissertation (指導教授は Karl Rahner, S. J.) であり、著者は現在ミュンヘン大学哲学科の助手の一人として活躍している。

本書の参考文献表の中に加えられていないが、しかしこの研究の契機を先取りし、それについて大変簡単にではあるが述べていたひとつの小論文がある。それは Josef Pieper の “Unaustrinkbares Licht. Das negative Element in der Weltansicht des Thomas von Aquin,” München 1963, 2. Aufl. (邦訳: 田淵文男訳「汲み尽しえない光——聖トマス・アクィナスの哲学における否定的要素」『カトリック神学』第六号所載) である。Pieper はそこで、トマスの哲学において彼の存在論を全体的に根本から規定しているのは「創造」の概念であり、この概念はトマスにとって余りに自明であったので、いわば言外の言として彼の著作のうちにもこれについて明確には論じられていず、それをわれわれが行間読み取りなければトマスの哲学を正しく理解できない、と述べている。すべてのものは創造主なる神によって、想造された *erdacht* ものであることによって、被造物であるものは認識にたいしてその存在にかなった明るみと公開性と同時に (*im selben*)、その不可測性とをあわせ持つことがトマスには明確に意識されていたがゆえに、このことを理解せずしてトマスが一方では「知性はものの本質にまで透徹する」と言い、他方では「われわれは一匹の蚊の本質さえも把握しえない」と言っていることの真意をわれわれは正しく理解することができないのであ

る。人間的認識の場における真理の概念と創造の神秘としての不可知性との結合を Pieper は彼の論文で取り上げたのだが、この問題をさらに掘り下げるなら、認識において言われる思考と存在の合致は、すべてのものの存在が存在そのものによって成立していることにより、存在するものと存在のあいだの存在論的差異性と同時に、存在が存在するものを現象させつつも、その現象そのもののうちに存続していること（同一性）を明らかにする試みを新たに提起し、この試みはしたがって存在するものの根拠への問いの遂行として把握されなければならない（cf. Martin Heidegger : *Identität und Differenz*, Pfullingen 1957）。この同一性と差異性が由来する創造そのものの意味をトマスの形而上学の根源として十全に理解しないとき、「偏向した」学校（スコラ）哲学が出現するという意見で Pieper もまた Dümpelmann も一致しているのである。

そのため著者は本書では、トマスが明白に彼自身の問題提起と固有の範囲内で創造について語ったことだけを収集して述べようとするのではなく、方法論的内容的に見て、トマスの創造論の背景をなし、創造論にとって決定的な意味をもつ形而上学的諸前提——これはトマスの創造論のうちに反映しているとはいえ、展開されてはいず、全くあるいはせいぜい輪郭しか述べられてはいないものなのだが——を問題にする。この理由から本研究は、本来この研究に続くはずの Fabro, Geiger, Siewerth などによる優れたトマス研究書を批判的に参照しつつ、それらの研究成果を「看過する」のである。

本書は4部から成る。第1部は「創造論の形而上学的基礎」（トマスにおける *esse* の解釈）と題され、上述した形而上学的諸前提が開示される。ここで著者が特に注意をうながすのは、トマスにおいて *esse* の名のもとに理解されるべきものは何かが彼の創造論にとってはずでに前提されているということである。トマスの諸著作のうちに散在している、この前提 (*esse*) に関する詳細な記述に基づいてこそ、トマスは神学大全の創造論の冒頭で *esse causatum* と *esse non causatum* の相違を取り扱い、この相違を *partitipatio entis* の原理を引き合いにだして確認するが、その仕方は大変簡単なものであり、事実トマスはそこでは短く語るだけでよかったのである。そのためここでは *actus* としての *esse* の解釈が重要である。第2部では、著者が神の世界に対する関係（世界の神に対する関

係ではない) の理解のために強調する2つのテーゼが分析されるが、この2つのテーゼとは、創造の理解のために重要なものであって、つまり神の世界からの無限の隔絶と神の世界に対する「現実の関係無さ」 *relationes, quae dicuntur de Deo ad creaturam, non sunt realiter in ipso* である。これら両説の側から、一見矛盾するように思われるかもしれないが、次のような同じことを意味するテーゼにつき当る。すなわち、神の世界に対する身近さである。このようにここでは「創造論の領域からの3つのテーゼの解釈」がなされるわけであるが、その際著者は Heidegger の基礎的存在論の方法を自分のものにし、それを批判的に駆使していることは興味深い。第3部では「創造行為」における *actio transiens* と *actio immanens* の弁証法的な相互・対立関係が説明されるが、これは従来ほとんどかえりみられなかったトマスの説である。存在論的には *actio transiens* の働きと、この *actio* から生み出されたものはその *actio* の内的な存在にしたがっては同じ (*selbig*) である。そう見るならば、神の行為は被造物の被造性からもはや分離されなくなる。この意味で神の行為は「相違していないもの」 (*das Ununterschiedene*) と言うことができる。神の行為と神の存在とは同一なのである。こうして「相違しない所の相違としての神」という題は、存在論的に思惟可能なものであるばかりか、ただそのように考えられるべき共属性 *Zusammengehörigkeit* と、世界の存在と神の存在との「いわば同一性」 (*Quasi-Selbigkeit*) を意味するのであり、これは決して世界と神との同一性を単純に指向するものではない。むしろ、世界と神の同一性を説くことこそ「存在的一汎神論的神理解にして世界理解」と言うべきで、それはこの研究において厳しく排除されなければならないものである。第4部では、被造物の能動知性の光についてと *lumen increatum* と *lumen creatum* の関係についてのトマスの説が著者の問題性、つまり創造を神の側から考察すること、のもとで問い直される。その際この関係の *visio Dei per essentiam* の説における極端な強調において神の世界に対するラディカルな近さが再び明らかにされ、そのため「非相違性としての神」はまた新しい支持を得ることになる。

著者はトマスの創造論の基礎を深く探究することを通して、トマスにおける被造物の存在者性格を規定する方法と彼の神学的認識の方法とその認識の意志の原

因ともなっているのが、まぎれもないアリストテレス的方法であることを洞察し、このアリストテレス主義がトマスの本来的な神学的認識においては2つの起点から出発する二本の軌跡のうちに認められると説く。この2起点とは *ex parte creati* と *ex parte creantis* であって、これらから出る2本の思索の軌跡はトマスにおいてたえず内的緊張と二元性としてとどまり、彼の創造論を特徴づけている。この二元性によってトマスの神理解のうちに「存在論的差異性」があり、この「差異」は上述の2起点が等しく注目されるならば明らかにされるものである、と著者は言う。トマスは時折、創造の「神の側から」の考察を「被造物の側から」の考察方法のうちに取り入れることによって彼の二元論に対処しようとしている。しかるのちわれわれは創造から創造主への道のりを歩むことができるし、神の世界に対する関係は「世界の神に対する関係」に還元されることとなる。このような意見は納得のいくものである。たしかにトマスは創造論を展開するに当って、被造物の側からの出発により多くの関心を示している。しかしこのことを強調する余り、神の世界に対する関係についてのトマスの創造神学における他の面（創造神の側から）を看過することは許されない。実際に彼の創造神学におけるこの他の面についての発言は量的にわずかであり、目立たないものではあるが。だがトマスが特に世界の有限性について論じる際には、神と世界のあいだの「差異・相違」を前提にして（e.g. *II.Sent.* 1,1,5）、創造を神の側から考察するのである（e.g. *Pot.* 3,3C）。「神の側から」語るなら、創造は神の本質である所の神の行為である。そしてこの起点は決して「被造物の側から」の考察と矛盾するものではない。むしろ著者は「神の側から」の考察こそトマスの創造論の形而上学における「決定的な語り出し」と見る。なぜなら、と著者は言う、この起点は、他の起点からの解釈と要求にとって受け入れられないような奇異な主張を何も行っていないからである。トマスが創造を神の側から考察する際に語った「神は被造物とは *realiter* には関係を持たない」という意見に接して、著者は「創造の本質とは何か」そして「創造主としての神はなお世界と本来どのような関わりを持つべきなのか」という新たな問いを立てるのである。このような問いに対してトマスは明白な解答を提示してはいない。この解答を著者はもう一度トマスによる神の側からの創造論に還帰し、それを認識可能なものの認識主体との

関係というアリストテレス的方法と結びつけることによって引き出そうと本書で試みるわけである。また著者は、*Indistinctione distinguitur* という言葉で神の被造物への関係を表現した Meister Eckhart との比較研究を考慮するならば、Thomas と Eckhart の二人のドミニコ会神学者の精神的な親近性と結びつきが明らかになるのであろうとも指摘している。本書のいくつかの有意義な指摘を受け入れることによって、トマスの形而上学の理解がより深められることと思われる。